

〔翻 訳〕

『スペクテイター』(30)

——第286号から第295号——

門 田 俊 夫

第286号 1711年1月28日(月曜日)

悪徳はしばしば誠実な仮面を被っている(タキトゥス)¹⁾

観察者殿

1712年1月18日, ヨーク

小生としては、喜んで審美眼を発揮なさっておられる紳士²⁾に敢えて正当な審美眼についてお知らせするつもりはありませんが、読者の皆さんに繊細さというものには真実のものと偽りのものがあることをお知らせしても差し支えないものと考えます。小生の考えでは、真実の繊細さというものは、判断力の正確さと感情の威厳にその本質があるのであって、貴殿の言い方ですと、感情の純粹さであって、腐敗や粗野とは対立するものです。学問だけでなく育ちの点でも術学者はいます。光に耐えられない眼は、敏感だからではなく痛みを感じるのです。健康は器官が正常であって活力がみなぎっているからであって、胃が吐き気を催す場合は健康とは言えません。偽りの繊細さは礼儀正しさではなく見せかけなのです。繊細さを測る基準はもっぱら真実と美徳なのです。美徳は、諷刺家が以前から言っているように、正真正銘の名誉です³⁾。一方、その対極にあるものは単に名ばかりのものです。このルールに基づいて判断しますと、小生および多くの徳高い女性の考えでは、貴殿にはコートリー氏から非難されるいわれはありません。つまり、貴殿は非常に礼儀正しいお方であるために、時代のせいであって、私たちの信念からするとどうみても認められないひどい罪の限りない言い訳を許すことができないようです。クリスチャンと呼ぶ国では、この原則が墮落した人々や無分別な人たちが従っているルールに取って代わられるべきだと考えます。行儀作法にとって、邪悪な行為にまことしやかな呼称をつけるほど有害なものはありません。このことが悪徳と美徳を混同させ、本来悪に対して抱く嫌悪感を取り除くことになるからです。売春婦という名称を聞いてびくっとする無垢な人は、恋人と呼ばれると心地よく思うかもしれません。誘惑者が女性に向かって、神様にとっては心の結合が最も重要なのであって、教会でのお務めは単なる儀式に過ぎないのだと知らせる場合はとりわけそうです。同一の行為を表現する卑猥な言葉と慎み深い言葉の違いが単に

1) タキトゥス『年代記』14.21からの脚色。

2) 第276号参照。

3) ユヴェナリス『諷刺』8.20

副次的な考えにあることは、文字や音節には淫らなものは何一つないのでから、誰にも分かりません。密通や姦通は慎み深い言葉です。なぜなら、これらの言葉は罪人としての邪悪な行為を表し、恐怖や嫌悪感を喚起させるからです。一方、罪というよりは快楽を表す言葉は、同じ理由から淫らで不誠実なものとなります。もし貴殿が愚かな自己愛や巧みな眼差しを冷やかす調子で、おぞましい淫らという罪を論ずれば、貴紙は無作法よりもっと重い責任を負うことになり、不健全なものになります。殺人とささいな窃盗に同じ刑罰を科す法律が極めて不当であるのと同じことなのです。たとえば思いやりがあって、最初に売春窟に売り渡されその後追い出される困窮者の不正に寄せられる同情も、富める者の住居での増長した悪徳を考慮すると、嫌悪に変える必要があります。コートリー氏の言う自由奔放な上流階級の人は、正確に言うと、生まれも育ちも忘れ、血縁関係と自分を辱め、持ち前の女性としての慎みに加えて美德と信望を捨て、魂そのものまでも危険にさらす女性は、心優しい女性と同じように扱うには程遠いので、(きっとコートリー氏の言いたいところでしょうが) 彼女が大きな拘束に背くことであまり辛らつにはなれず、貧困な女性ほどには人目にさらされることもなく、誘惑を受けることもありません。したがって、多くの無垢な人がモレク⁴⁾に捧げられた子供たちよりもむごい犠牲にさらされている町の途方もない不正を暴くという貴殿の高潔な計画を諦めないで頂きたいと考えます。淫らな人は悪徳がさらされるのを見て駆り立てられ、貞淑な人は汚れを詮索すると必ず汚辱を受けてしまいます。ところが、純粋な観察者なら底辺を覗き込み罪を犯さずにうまくやれます。そうして頂けますと、私たちは貴殿がご自分のためではなく、社会のために尽力なさっておられることが確信できます。だが、もし貴殿の熱意が冷めると、コートリー氏の手紙は逃げ出すための口実に過ぎないのだと考えざるを得なくなります。そうなりますと、貴殿ご自身あるいは貴殿がご最良になさっておられる人々あるいは貴殿が気遣っていらっしゃる人々の個人的でさもしい目的を改革することにはなりません。

貴殿が真実と美德と名誉を追求なさる限り、小生はいつまでも貴殿を尊敬致しますので、何卒よろしくお願い致します。

敬具

拝啓

1711-12年1月12日、ケンブリッジ大学、トリニティ・コレッジ

多くの点で意見を同じくしているのですが、ひとつだけ光と闇のように意見が異なるルームメイトを持っていることは、小生にとって幸運なことです。二人とも恋をしているのですが、ルームメイトの恋人は色白で金髪の美人で、小生の恋人は褐色の肌をした美人なのです。そこで、互いに恋人の美しさを称えるとなるといくら時間があっても足りませんが、この話題になりますと、私たちはしばしば口論になってしまいます。双方とも自分の選択を正当化して譲らないのです。小生はどうかと言いますと、可能な限り想像力を駆使し、時々、極度に興奮して、ルームメイトに向かって夜よりも昼の方が先なのだとか、その他こまごまとしたことを色々並べ立てますが何の効果もありません。それどころか、昨

4) モレクは子供をいけにえにして祭ったというセム族の神(『レビ記』18.21)

夜は分別というよりは興奮のあまり、悪魔は白塗りにすべきだと言ってしまったのです。そこで、お願いですが、私たち双方の論点となっています黒と白について貴方のご意見を聞かせて頂きたいのです。ご意見をお聞きすれば、小生の審美眼を主張するための斬新で優勢な論拠となるか、あまり口ごたえせずに、ルームメイトの審美眼を認めることになるか、いずれにしても両者の争いに何らかの決着がつきます。小生には味方としてジョン・クリーブランド⁵⁾とボンドのホラティウス⁶⁾がついていることは十分承知しています。だが、ルームメイトには、一群のへぼ詩人やロマンス作家がついており、彼はこれでもって小生に立ち向かってきます。そして、金髪、黄色の髪、ミルク、大理石、象牙、銀色、白鳥、雪、ヒナギク、ハトなどなどの節を繰り返し唱えるのです。それが小生の耳にとっても激しく響きますので、しばしば小生は彼にやり返すために褐色の研究をしなくてはなりません。貴方の時宜を得たお助けがありませんと、うろたえてしまうに違いありません。

敬具

褐色を愛する男より

第287号 1712年1月29日(火曜日)

【アディソン】

親愛なる生誕地よ、善良で賢明な人は汝の
満ち足りた風土と数え切れない天恵を称える。(メナンドロス)¹⁾

かりに自分で宗教および政府を選ぶことができるとしても、必ずやわが国に定着している宗教および政府形態を選択することになるのはこの上もない幸せだ、と私は考えています。この点での私の堅い決意は、根拠と確信に裏づけされているものと考えます。もし私が先入観に左右されていると言われれば、それは誠実な先入観だと確信しています。この先入観は愛国心から湧き上がるものであって、私は常にそこに身を任せているのです。数回にわたって、私は英国国教会への義務と尊重を述べて、わが政体についての評論を考えました。私としては、ほかの著述家では遭遇しないこのテーマについて意見を表明することで楽しんでいるのです。

私には、わが国の政府の形態は最も理に適ったものに思えます。それが社会の治安と平穩に矛盾しないならば、人間性の平等に一致したものなのです。これはおそらく自由と呼べるものであって、自由とは政体の秩序と経済が許す限りにおいて互いの服従関係を免除するものです。

5) ジョン・クリーブランド(1613-58)は王党派の詩人。彼は『詩集』(1651)の中で、褐色の肌色を称えている。

6) ジョン・ボンドの『ホラティウス注釈』は、17世紀および18世紀にしばしば増刷された。ホラティウスは黒い目、黒い髪を称えたとのこと。

1) メナンドロス(342?-292?) *Nauceros*, 349 メナンド罗斯はギリシアの喜劇詩人。

人々は共通の造物主を共有しているのだから、自由は各人に行き渡らなくてはなりません。もし自由が特定の人たちだけのものであるなら、そういった自由は不愉快な比較の対象を用意して、自由を奪われている人々の不幸を悪化させるだけになるので、全くない方がましです。

法的権力が数名に、特に階級も利害も異なる人たちの手に委ねられている場合には、自由がうまく保たれます。なぜなら、権力を握る人たちが同じ階級であって、その結果その階級の利害だけを考えるようになると、単独者による独裁政権と何ら変わらなくなるからです。ところが、法的権力が適切に区別された人たちの手に委ねられる場合には、人々は自由に対する保証が得られます。それぞれの階級の利害に備えることで、彼らは全体の人々のことを考えることになるからです。言い換えると、少なくとも立法者の一部だけの利害では各人の自由は保証されないのです。

立法者の組織が一つしかない場合には、専制政治と何一つ変わりません。組織が二つしかない場合には、決定票が必要になり、必然的に双方に生じる論争によっていずれかが最終的には相手方の意見を飲まざるを得ません。組織が四つの場合も、二つのときと同じ不都合が生じ、組織があまり多すぎても混乱するだけです。私はポリュビオス²⁾やキケロの文章³⁾を読むと必ず、これはローマよりもむしろわが国にふさわしいのですが、わが国体に適用できるものがあって内心ひそやかに喜びを覚えます。この偉大な著述家は双方とも、皇帝と貴族と人民の三部門からなる混成政治体制を評価します。おそらく双方とも、執政官が王、元老院が貴族、護民官が人民のローマ共和国の政体を念頭に置いていたものと考えられます。ローマの政体におけるこの三権分立は、決してわが国の政治形態におけるほど明確で自然なものではありませんでした。これに対するいくつかの異議の中で、主だった異議は執政官の権力に対するものだ、と私は考えます。執政官の権力は皇帝の権威がなければ飾りに過ぎなかったのです。その数は決定票を握っていませんでした。そのため、執政官の一人がたまたま国外に行って留守をしており、もう一人が国内にいる場合には、二人がそれぞれ意見を異にし国政は時々停滞しました。そのうえ、執政官たちが法律あるいは元老院の布告を可決するさいに反対票を投じたことはありませんでした。その結果、彼らは実際には、誰もその一部と見なされることができない、立法府の一部でない統治権の明確な部門というよりはむしろ、貴族の中心つまり第一大臣だったのです。もし執政官にわが君主のように、皇帝の権威が大幅に付与されていたら、三部門すべての権力を握る独裁権に繋がり、最終的に国体の転覆になってしまうようなことはなかったと思われます。

一連の絶対君主について伝えてくれるスエトニウスの語る歴史は⁴⁾、私にとっては専制

2) ポリュビオス(200? - 120?) 『歴史』 6.3-18 ポリュビオスは古代ギリシアの歴史家で、『歴史』(40巻)を著す。

3) キケロ『国家論』 2.23.41 アディソンは、アリストテレス、ポリュビオス、キケロは三名とも「帝王と貴族と人民」の三者からなる混合政府を推奨していると述べている。

4) スエトニウス(75-160) 『皇帝列伝』は、1672年に英訳が出た。

権力に対する反論の余地のないものです。君主が知恵と徳を備えている場合は、君主が絶対的であることは人々にとって確かに幸せなことです。ところが、一般的には、知恵があって善良な人は10人に1人であって、国としてそれにかけ、人々の幸不幸をただの一人の美德悪徳に委ねるのは極めて危険なことです。私の取り上げている歴史家あるいは一連の絶対君主を調べて見てください、大多数が暴君であって、支持できる皇帝に出会うことは稀です。これですべてではありません。誠実な私人が絶対的な君主になると、残忍で奔放な人物になってしまうことがしばしば見受けられます。人間に好きなことをとがめられずに行う権力を与えると、恐れは消え、その結果、巨大な倫理性の柱が倒壊してしまいます。このこともまた、事実として確認できます。大帝国の継承権を生まれながらにして有している多くの有望な後継者が、ひとたびその権力を有してしまうと、人間性の汚点であるおそろしく貪欲で残忍な人物になってしまう例には事欠きません。

地上の私たちの政府を天国の政府のようにすべきだと言う人がいます。つまり、絶対的権能を有した絶大な力を持った政府にすべきだと言うのです⁵⁾。もし人間が善と正義において神のようであるなら、私はこの壮大なモデルに賛成をしますが、支配者にとって善と正義が不可欠でないところでは、私はどうしても支配者個人の意志と好みに身を委ねることには賛成する気にはなれません。

専制政府と非人道的行為の関係を考えると奇妙です。一人の人物を人間以上の存在にしてしまいますと、その他の人々は取るに足らない存在となってしまいます。世界の九割がたは最もひどい隷属状態にあり、その結果、ひどく非人道的な状態となっています。ヨーロッパの隷属状態は、世界のほかの三地域と比べますと、実際には自由な状態と言えます。それゆえ、隷属に屈服している人々に、ほかの地域の人々には完全に欠けている自由への手掛かりがあるのは少しも不思議なことではありません。

富と豊かさは自由の当然の成果です。富と豊かさが満ちているところでは、学問と教養が直ちに頭を持ち上げ開花します。空想や思索を膨らませ、深遠な真理の探究をする人々は卑屈な恐怖や不安を抱く必要がないと同時に、生活の便宜を手に入れる能力を身につける必要があります⁶⁾。

誰もが最初に気を配ることは必需品を準備することです。充足されるまでこれに没頭することになります。必需品が手に入りますと、つぎは喜びや娯楽を得ようとしします。夥しい数の怠惰な人たちの中に、読書と瞑想に喜びを見い出す人々が数多く存在します。読書と瞑想は大きな知識源で、賢明になると、当然、その発見を伝えたくくなります。また、そういった学究生活の幸せを見て、彼らとの交際によって向上する人々は、互いに張り合い、手本にし、しのぎを削ります。その結果、国には賢明で分別のある人たちが溢れます。それゆえ、知識を育む大きな源となるのは安楽と豊かさなのです。専制政府の大半にはこの二つがありませんので、当然のことながら、無知と粗野がはびこります。ヨーロッパでは、

5) ジョン・イーブリン (1670-1706) 『日記』

6) エイブラハム・カウリー (1618-67) 『詩集』(1656) 序文。「好戦的で落着きのない悲劇的な時代については書きやすいが、その時代に書くのは最悪だ」

実際には絶対的な君主が散見されますが、なかには知識と学問で名高い人物もいます。その理由は臣民の多くが豊かであること、そして、臣民が過大な自由への可能性を期待して新たな国体を待ち望まないようにするために、君主が東方の国家の君主のように専制を完全に発揮しない方が適切だと考えているからです。だが、あらゆる専制政府では、芸術や文学に好意を示す君主がいる場合もありますが、アウグストゥスの治世で、ローマ人たちが徐々に自分を見失い、ついには周辺の非常に野蛮な国の人々と同列にまでなった例に見られるように、無理もない人間の退化があるのです。自由国家時代のギリシアを見てください、住民は現在とは異なる風土や空の下で生きたのです。つまり、トルコの隷属下にあった場合とギリシアの自由を謳歌していた場合の才能は異なっています。

貧困と欠乏のほかに、私はこれこそ主たるものと見なしていますが、隷属下の人心を卑しくするものがほかにもあります。どなたも主張しませんが、専制的な権力こそが無知と野蛮を呼び寄せるのだということが、政府形態に対して反論する余地のない論点だ、と私は考えます。専制的な権力は、あらゆる国家制度にとって最大の目的であるべき人類の幸福と人間性の成熟にとっていかに相容れないものかということがお分かり頂けるものと思います。

第288号 1712年1月30日（水曜日）

【スティール】

双方とも心もとない不安を覚える。(ホラティウス)¹⁾

拝啓

貴方は男たらしやなまめかしい女のことを語る際には、公平に扱い、男性のことにも触れ、彼らの秘められたあるいはあからさまな欠陥を認識なさると約束なさいました。そこで、私は「女たらし」という呼称の人たちについて語る気になったのです。彼らは結婚する気がないが、色恋のセンスを持ち合わせているように振舞い、特定の女性に敬意を払わなくてはならないと考えている紳士なのです。そのため、彼らは並み居る女性たちの中から一人選んで、その女性に結実することのない求愛を試みます。その相手を決めると、彼らはまずあらゆる機会を捉えて彼女に近づきます。そして、必ず、彼女になれなれしく接し、彼女に心酔し、情熱が真実であることを繰り返し繰り返し誓い、見返りを請い求め、あらん限りの知恵を絞って口当たりのいいことを繰り返します。もしそれがうまく行くと、一般に二様に解釈できるような語り口をします。信じやすい女性は、しばしば、世間のことはすべて自分同様に誠実だと思っている未熟で経験のない若い娘なので、その人の言ったことを自分に都合よく受け取ることになります。その結果、娘の油断は嘘つきの人でなしの餌食となります。人でなしはそれに気づくと直ちに冷静になり、それまであれほど称えていた女性を遠ざけ、別の女性に対して同じように陳腐な悪行を始めるのです。こうい

1) ホラティウス『書簡詩』1.6.10

った忌まわしい勝利に元気づいた伊達男は、哀れな女性たちを気の毒に思うと言い、自分は結婚なんて考えてもいなかったのだと断言し、丁寧な喋り方をすると妙に誤解されることがあるのだと言います。そこで、観察者様、愛の味方だと公言なさる貴方に、崇高な情熱を悪用し、虚偽の見せ掛けで無垢な人たちをその気にさえ、その後で夢中になった人を見捨てる人たちについて意見を述べて頂きたいと思います。何卒、すでに失意の渦中にあるあるいは失意の危険性にさらされている騙されやすい女性たちに助言を授けてあげてください。そうして頂けますと、この町の多くの人たちは有難く思うに違いありません。

敬具

貴方のことを心の底から敬服していますメレイニアより

メレイニアの訴えは世間一般にはびこっている愚行が引き金となっていますので、これを長い間見逃してきたのは不思議なことです。この偽りの色恋は、後ろめたく思う人たちに自分が好ましいと思うことを追求できなくさせる心の虚弱さに起因します。数多くの男性は自分が妻にする勇気のない女性が妻であればいいと思うものです。誰にも自分の性癖あるいは運命を左右する力はないのですが、世間の評判の奴隷となります。メレイニアが女たらしに非常に穏やかな名前を付けているのはこのためだと思います。私は、優柔不断は身体の無力さと同様になさけないものだと思います。別の点で無能な人と同じ言葉で括る場合、こういった軽薄な崇拜者を優しく取り扱うことになります。今後は、わが寄稿者が「女たらし」と呼ぶ人たちを「遊び人」と呼ぶことにしたいと思います。遊び人とは言い寄る女性に有頂天と感嘆の声を上げ、とにかく同意を得たいとびくついている人のことです。彼の心は妄想に駆られてそわそわし、分別の力を働かせて落ち着くことはできません。ほどほどの資産を持った娘たちの両親が遊び人の求愛を見てみぬふりをし、子供たちをメレイニアの訴える曖昧な振舞いにさらすのは珍しいことではありません。その結果、両親は娘を溺愛するあまり、自分を見失い、愛を受け入れられなくなります。そして、その後の結婚は、喜びのない惨めなものとなってしまいます。それゆえ、私が愛に関する思索で、男たらしとふしだらな女について厳格に語るのと同様に、取るに足りないふざけた男性に対しても情けは一切かけません。このため、娘さんがいる家に頻繁に出入りする人は全員、直ちに、愛を打ち明ける必要があります。さもなければ、自分たちが姿を見せることで相手に都合よく思わせるような場所に行くことを避ける必要があります。もてあそばれることは大変なことなので、若者たちは姿を見せることにどういう意味があるのか満足のいく説明をして欲しいものと考えます。ストレフォンはユーダミアに呈示した謎の説明をするのに7日かけますし、クローリスは、美点は自分と同じくらいだが資産は自分よりも上の女性が自分のものになりたいと願っているフィロタスを受け入れるかどうか1時間後には明らかにします。

観察者殿へ²⁾

非常に多くの商人が著述家になり、自分の扱う商品を称えた巧みな広告を出しますので、

著述家から商人になった人物が再度著述家になるために、商売の促進をすることが許されるものと考えます。とはいえ、小生はほかの人たちのように非常に有能で誠実な商人ほど安売りをするふりはいたしません。また、選び抜かれた磁気や漆器、お茶、扇、モスリン、絵画、アラック酒、およびその他インド製品やそれらを安価で提供していることを知ってもらうために、この手紙を書いているのでもありません。小生の店は商売の中心地インド商会近くのレドンホール・ストリートにあり、親切なお客様のお陰もありまして、小生の芝居やオペラの慈善興行日と同様、ご愛顧を賜っています。小生が扱っています外国製品は、小生が翻訳しましたラブレーやドン・キホーテなどの外国書と同様に喜ばれているようです。このことは批評家のみなさんがお認めになっておられます。また、彼らは当店の商品は好まれますが、小生の書き物はけなされるかもしれません。今までのところ小生が最近頻繁に海を渡っていることは知られていませんが、小生は他の外国語に加えて、オランダ語やフランス語を使って、金銀をあしらった高価な錦織物やオランダの地図帳、最新で最高の生地の絹織物、見事なフランダース製レース、リンネル、および絵画を安価で買入れています。小生が始めていますこの新しい商売のやり方を広めるには、貴殿にお願いするのが最適と考えます。当店の商品は貴紙の読者の方々にこそふさわしいのです。そこで、どうかこれを貴紙で活字にさせていただき、貴紙によって心に彩を添えていらっしゃる方々が、容姿やお住まいの彩りは当店にお任せしていただければと考える次第です。お願いを聞いていただけますと、大いに助かります。なぜなら、値打ちものの高価な絹織物や見事なレースが入荷しており、早く現金化するために安売りを考えているからです。また、その他の商品もいろいろ揃っていますので是非ご利用下さい。以前は、インドの絹織物が主力商品でした。その販売が禁止となっていますので、他の商品で埋め合わせをしなければなりません。これが瞑想をからかう人の数を減らし、気分を境遇に合わせて、市民を高揚させる詩人を卑下する人の弁護になって欲しいものと希望します。小生は本物の商人のように、会計以外の書物にはほとんど目を通しません。実を言いますと、小生が紛れもない商売人であることをお伝えするには、貴紙に目を通すよりも広告に目を通すほうが多いのだということを認める以外にはないと思います。小生はこの機会を捉えて他の著述家には小生に倣って、これ以上町の人々に迷惑を掛けて欲しくないという警告を発したい誘惑に駆られています。今は売り手よりも買い手の数を増やすのが仕事ですので、急ぎペンを取った次第です。

敬具

ピーター・モットゥー

-
- 2) この手紙の書き主はモットゥー。ピーター・アンソニー・モットゥー（1663-1718）は、1685年にフランスからイングランドにやって来て、『ジェントルマンズ・ジャーナル』の主宰となり、ラブレーやドン・キホーテを翻訳する一方で、芝居やオペラの台本を書いた。その後、レドンホール・ストリートに商店を開いた。スティーलと親交があった。

第289号 1712年1月31日(木曜日)

【アディソン】

寿命はあなたに心配事を先延ばしすること、
希望を年齢以上に広げることを許さない。(ホラティウス)¹⁾

私がコーヒーハウスに入って席に着きますと、しばしばみんなの目が私に向かいます。最新ニュースが入ってくる時期で、おそらくオランダのメールが入ってきたばかりの時には、人々の耳には、ボーイに先週の「死亡報告」²⁾を持って来て欲しいと頼んでいる私の声が届きます。このため、私は時々教区の寺男や葬儀屋や医師などと誤解されることがあります。しかしながら、この場合、定期的な人口の増減³⁾について熟考して、現世から来世へと向かうさまざまな道筋について考えるのですから、私は哲学者の精神によって動かされていることになります。私は理性的な人が日々考慮すべき思考に導いてくれる毎週の警告にとっても満足しています。私は喜んで思いを馳せることができるのです。出産とかいわゆる病気のことを考えることで、現実の悲しみから抜け出しあの実在へと向かうことができるのかもしれません。そして、現在の私が思いつくよりももっと幸福な状態を願うのです。

ところで、上述の週刊誌の利用方法はこれですべてではありません。「死亡報告」は、私の意見では、神の摂理を背景にした反論する余地のないものです。神の不断の配慮を抜きにしては、すべての大都市で、死と誕生、そして、この世に送り出される男と女の数の絶妙なバランスについて説明がつきません。すべての国の新生児と死者の数を見事に合致させ、新たな人の供給も男女同数にすることができるのは、神の摂理以外の何ものでもありません⁴⁾。偶然ではこれほどしっかりした手並みでバランスを保つことはできないでしょう。聡明な監督者が数を割り出さなければ、時には人口過剰になってしまい、又ある時には、やせ衰え寂しくなってしまいます。時には、フローラスが上品に表現する「男性の世代」となりますし、又ある時には、女性の世代となります。この考察をすべての生物種に広げ、全動物世界を、この用語を使用するとすれば、無数の「部隊」で構成される巨大な軍隊と考えることができます。この定数は5万年近く実に見事に無傷で保たれてきており、この間、おそらく、ただの一つの種も消滅していないのです。もしあらゆる動物の死亡報告ないし各大陸や島の特定の死亡報告が手に入れば、あらゆる森、沼、あるいは山で、あらゆる御業に目を光らせておられる摂理の驚くべき実例を挙げることができると思います。

1) ホラティウス『頌詩』1.4.15

2) 「死亡報告」(Bill of mortality)は、ロンドン教区教会書記局から毎週発行され、洗礼および死者の数が掲載された。

3) 医学の進歩に伴ってイングランドの人口が急速に増加し始めたのは18世紀半ばからのことだった。

4) フランスの司教・雄弁家だったボッシュエ(1627-1704)も「死について」という説教で同様のことを言った。

私はカトリック教会のある偉人についてつぎのようなことを耳にしたことがあります。この偉人は創世記第5章の「アダムの生きた年は合わせて九百三十歳であった。そして彼は死んだ。セツの年は合わせて九百十二歳であった。そして彼は死んだ。メトセラの年は合わせて九百六十九歳であった。そして彼は死んだ」を読んだとき、来世のこと関心を寄せない現世のものは何一つ追求する価値がないと考えて、直ちに修道院に閉じこもり、隠退したということです。

実は、我々が目にする著名人の死およびその人の生前の振舞いに関する記事ほど、読者にとってためになるものはありません。同時に、これほどはっきりと読者に影響を与え、読者の意に適うものもないと付け加えることができます。私がこのように考えますのは、そういった人物の話には、おそらくそれを読むすべての人に当てはまる事情は何もないからです。戦闘とか勝利はめったに関わることのない危急の事態ですが、死に瀕している人物を見ると、その人の言うことやることすべてに気を配らざるを得ません。なぜなら、いずれ私たち自身も同じように悲しい出来事を受け入れざるを得ないことが分かっているからです。将軍とか政治家とか哲学者は、おそらく、私たちが演じることのない人物ですが、死に瀕した人物は遅かれ早かれ私たちが必ず比することになるのです。

英語で書かれは書物のほとんどが、シャーロック博士の死に関する論文⁵⁾ほど読まれることがないのも、多分同じ理由からです。もっとも、この名著を読んだことのない人は、おそらく、いかなる言語であれ信心深い生活に関するこの上なく説得力のある書物も読んだことがないことを認めざるを得ませんが。

死に関する考察を締め括るにあたって、昔から言い尽くされてきた、人々に奨励されている教訓について考えなくてはなりません。この教訓はとてもありふれたことであり、広く受け入れられていますので、目新しさという長所はなくなっていますが、人々の普遍的な分別に合致しますので、重要さは大いに増しています。要するに、人間というものは現世では旅人に過ぎないのだということ、現世で心の平穏を得るには刻一刻向かっている確固とした永久の存在に絶えず気を配っておく必要があること、これをすべての人に考えてもらいたいのです。これさえ考えれば、憎悪の苦しみも強欲の渴きも野望の残酷さも消えます。

私は太古の詩人アンティファネスの文章にとて満足しています。彼はソクラテスよりもほぼ百年前の人ですが、人生に対して私が逐語訳をしますつぎのような見方をしています。「亡くなった友のことを法外に嘆いてはいけません。友は死んだのではなく、すべての人が歩まなくてはならない旅を終えただけなのです。私たち誰もが一堂に会するあの素晴らしい饗宴の場に行かなくてはならないのです。そして、そこで皆集まって、別の存在となって共に生活をするのです」⁶⁾と彼は言います。

5) テンプル法学院のウィリアム・シャーロックが著した『死について』(1689)はよく読まれ、18世紀初頭には版を重ねた。

6) マイネッケ『ギリシア喜劇断片』3.29, ウィンタートン『ギリシアのマイナー詩人たち』(1677)参照。編者たちによると、アンティファネスはソクラテスの百年前ではなく、百年後の人とのこと。

考えて見ますと、私は以前聖書⁷⁾に登場するこの美しい比喻について触れたことがあります。そこでは人生が長い旅にたとえられ、旅をする人たちはこの世の訪問者、寄留者と呼ばれています。本日の締め括りにあたって、ジョン・シャルダンの旅行記⁸⁾のどこかで読んだことがある話を引き合いに出したいと思います。この紳士はペルシアや東方の国々でキャラバン隊を受け入れる宿は「隊商宿」と呼ばれると語りますが、つぎの趣旨との関連があることを私たちに教えてくれます。

タタール地方を巡り、バルクという町に辿り着いたある修道僧は、宮殿を公共宿つまり隊商宿と間違えてそこに入って行ったのです。この修道僧は、しばらく辺りを見回した後で、長い回廊に入って行きました。そして、東方の国々の風習に倣って、休むために頭陀袋を下ろし、敷物を広げました。彼が敷物に腰を下ろすして間もなくすると、衛兵たちがやって来てそこで何をしているのかと問い質しました。彼は衛兵たちにこの隊商宿に一夜の宿を頼むつもりだと答えました。衛兵たちは激怒してここは隊商宿ではなく宮殿だと知らせました。言い争いをしているとき、たまたま王が回廊を通りかかり、修道僧の間違いに笑みを浮かべながら、よりによって宮殿と隊商宿を間違えるとはと言いました。すると、修道僧はひとつふたつ陛下にお尋ねしてもよろしいですかと言います。この宮殿が最初に建てられたときは、どなたがお住まいになっておられたのですか？ と尋ねる修道僧。すると、自分の先祖だと応じる王。ではごく最近お住まいになっておられた方はどなたですか？ と修道僧。すると、父だと応じる王。現在お住まいの方はどなたですか？ と修道僧。すると、自分だよと応じる王。では陛下のつぎはどなたでしょうか？ と修道僧。すると、息子の王子だと応じる王。「そうですか、住人がこんなに入れ替わり、これほどひっきりなしに客人を受け入れている家は、宮殿ではなく隊商宿なのです」と修道僧は語ったのでした。

第290号 1712年2月1日（金曜日）

【スタイル】

尊大でひどい言葉を忘れなさい。(ホラティウス)¹⁾

私が味方であることがよく分かっている役者諸氏は、あらゆる機会を捉えて私に感謝の気持ちを伝えてきます。彼らが最近つかんだ機会ほど、私に感謝の気持ちを伝えるのに最適の機会はありませんでした。彼らはわが友ウィル・ハニコームに『悩める母』²⁾という

ここでの誤解はおそらくウィンタートンに由来する。ウィンタートンは、アンティファネスを紀元前6世紀のテスピスと同時代と考えた。

7) 『創世記』第47章第9節、『詩篇』第39章第12節。

8) 『サー・ジョン・シャルダンのペルシアおよび東インド旅行記』(1688)、フランス語版は1711年にアムステルダムで出版され、アディソンはそれを下敷きにしたとのこと。

1) ホラティウス『詩の技法』97

2) ラシーヌの『アンドロマク』を脚色したアンブローズ・フィリップスの作品『悩める母』は、1712年3月17日にドリュエリー・レイン劇場で初演され、29日まで8回上演された。バックリーとトン

新作悲劇の読会に私を連れて来て欲しいと言ったのです。実を言いますと、その後数日経過していますが、登場人物たちの情熱が強く焼きついて忘れられません。やっと主人公たちに関わる出来事で真実と優しさが描かれるようになった時代に喜びを覚えます。作品の様式は、重要な教育も感情も最も高位な人物にふさわしいものとなっています。長年苦しみを装うことを職業としてきた人の目から本物の涙が流れ落ちるのを目にすることは、私にとってこの上のない喜びです。読み合わせをしている役者は、想像される悲しみの抑えることができない筆致に高まってくる人間性が表出するまで、しばしば本をふせるのでした。冷静に考えて見ますと、当該の人物の不幸というよりはむしろ弱さから生じていると思えないような女性の苦悩が舞台に登場するのは稀なことです。ところが、この悲劇では、ひたすら人間として互いに心を奪われるそんな抑制された情熱が伺えます。人々の心遣いは互いの美德と長所に対する高潔な考えに基づいているのです。この作品のタイトルとなっている人物は、女性として、妻として、母親としてとても大切な状況において、高潔な美德を発揮する人物です³⁾。人生の出来事に注意を払いすぎて特別な気性しか通用しないような窮境において愛情という情熱を考えることができない人々がいるとしたら、英雄的女性の悲しみは大多数の人間をも感動させることになります。家庭的な美德はすべての人々にとって重要であり、誰もがアンドロマケは見習うべき人物だということに関心を寄せることになります。亡夫の追憶への大きな愛、父親のことを考えることでさらに強調される息子への優しい思いやり、そして女王の位で誘惑されているにも関わらず失っていないこれらの心遣いは、現在わが国の劇場に足繁く通っている観客にとっても尊いものです。わが友ウィル・ハニコムは思いやりに溢れたいくつかの点について賞賛し、私に向かって非常に品がいいと言いました。その一方で、現在の好みからすると、この作品が差し出がましくなっていないのが気にかかるかと耳打ちするのです。その点を補うために、彼は役者たちに舞台では細心の注意を払うように、とりわけ、衣裳は完全に新しいものにするようにと助言しました。私は彼らがわが友の助言を無視しないことが分かってとても嬉しく思いました。なぜなら、彼の批評で得をする人たちが数多くいるからです。実際には、作品自体に関しては、どこを見ても道理に適ったものとなっています。人物たちは、王子たちも、高邁な資質を備えています。劇作家はその資質を描写するために、あらゆる場面で衛兵や従者が付き随うようにとの指示を出さず、彼らの威厳は身分にふさわしい彼らの心から流れ出る感情の偉大さに現れるのです。この作家には、人物を真に偉大に見せるためには、優れた思考と行動原理にその基盤を据える必要があることが分かっています。間違いなく、数多くの誠実な女性は、ヘクトルの妻だったが、国のために、夫の家族と国の敵

ソンが3月28日に出版し、モンタギュー公爵夫人への献呈の辞を添えた。その献呈の辞では、公爵夫人の父マルバラ公爵がヘクトルになぞらえられた。ピュロス役はブース、アンドロマケ役はオールドフィールド夫人だった。

- 3) 序文によると、芝居ではアンドロマケの母としての優しさ、妻としての愛情、寡婦としての夫への畏敬の念を強調するために、アステュアナクスを少し長生きさせたとのこと。ヘクトルとアンドマケの息子アステュアナクスはギリシア軍によってトロイの城壁から投げ落とされた。

と結婚することに異議を申し立てはしません。実際、彼女がそれでも誠実な女性であり、英雄的な女性であることを誰も否定することはできません。ある人物では弁護いや賞賛に値することが、別人ではこの上なく不快なことになることがあります。ウチカのカトー⁴⁾が自害したとき、コティウスという平凡なローマ人がその後を追って自害しました。そのとき、ある人物が「カエサルがローマ人の自由を奪っていたのだが、ひょっとするとコティウスは長生きしていたかもしれない」と笑いながら語ったのです。上層部の事態をそのままにしておくと、コティウスの境遇も同じことだったかもしれません。この悲劇のさらに際立った点は、人物たち全員が賞賛に値し、彼らの不幸が悪徳への偏向というよりも率直な美徳から生じていることです。礼儀正さ、名誉、育ちのよさというルールに基づいて情熱、悲しみ、憤怒、さらには絶望の描写を援護するとき、人々は十分持ち前を発揮することになります。自分の人生は常に幸運だと思い込める人は誰もいないのですから、この作品を見れば、不幸に見舞われたときの悲しみに耐える方法が分かるのです。

拝啓

小生は『悩める母』という新作悲劇で役を貰いました。小生の役は有名なオレステスの悲嘆です。でも、その悲嘆はあまりにも心の奥底からのものであって、これを口に出すことはできないと考えていますので、型どおりの演技をしない積もりです。昨夜あるセリフを一人で何度も繰り返しましたが、このセリフは怒りの表現で、中ほどに、小生の勇気をくじく自己憐憫の言葉が出てきたのです⁵⁾。そこでお願いですが、小生がこのように途中で重圧を感じるとき、観客のみなさんに小生が混乱していると思われたいために、この手紙を活字にして頂きたいのです。これをお認め頂けると、満足のいく演技ができるものと思います。

敬具

ジョージ・パウエル

前略

先日、公園を散歩していましたとき、とても顔の短い紳士をお見かけしました。そのお方が貴方だったのか知りたいのです。私がこの上もなく勇敢なヘカティッサ⁶⁾のライバルにならないためにも、出来るだけ速やかにお知らせください。

早々

ソフィア

お嬢様

あなたが恋をなさっておられるお方は私ではありません。このところ具合が悪く、終日

4) ウチカのカトー (B.C.95-B.C.46) はカエサルの政敵で、ポンペイウスに味方し、敗れてアフリカのウチカで自害した。

5) これは、オレステス役を演じたパウエルは、友人ピュラデースとの場面3幕1場のことを言っていると考えられる。

6) ヘカティッサに関しては第48号、第79号参照。

部屋に閉じこもっていましたので。

観察者より

第291号 1712年2月2日（土曜日）

【アディソン】

彼の書くものに数多くの美しさがあれば、
たとえ、欠点がいくつかあっても、私は非難しません。
共有する弱さがそれを見過ごし、注意が向かなくなります。

（ホラティウス）¹⁾

ミルトンの『失樂園』について、寓話、登場人物、感情、および言語という四つの点から考察しました。そして、そのぞれの点で、一般にミルトンが秀でている点を明らかにしました。私としましては、批評に精通している人たちにとっても目新しく思われる発見をいくつかしたのではないかと考えています。もし、私の浮沈がその評価にかかっています読者を実際に選ぶことが可能であるなら、フランスやイタリアの批評家だけでなく、ラテン語かギリシア語で書かれた古今の批評家にも精通した人であって欲しいと思います。とりわけ、ギリシアおよびラテンの詩人に精通した人がいいと考えます。これらの知識がありませんと、実際にその批評家が言おうとすることが分からないときに、往々にして自分はその人のことは理解していると思ってしまうものなのです。

批評においては、他の科学や思索の場合と同様のことが言えます。作品を読むときに、信じて疑わない見解を持つ人は、自分自身の考えを順序だてて説明することになり、脳裏をよぎったいくつかのささやかな手掛かりも優れた批評で完璧なものに仕上げます。一方、こういった視点を欠いた人は、往々にして、自分が読むものに対してずぶの素人であって、間違った解釈をしてしまいます。

また、批評のプロと主張する人は、同時に明晰で論理的な頭脳の持ち主でなければ、前述の著述家の作品を精読しただけでは不十分です。この才能がないと、絶えず大失策をして当惑することになり、やりこめようとする人たちの意図を誤解したり、たまたま当を得たことを考えても自分の考えを他者に明快かつ分かりやすく伝える方法が分かりません。最も優れた批評家であったアリストテレスは、同時に、これまでに最も優れた論理家の一人だったのです。

自分がその道に熟達しており、評論で名声を獲得していると思っている人は、ロック氏の『人間悟性論』をととても風変わりな書物と思うに違いありません。言葉と事物を識別し、どんな思考であれ、その思考を整理し、正しい見方をするわざを身につけていない著述家は、混乱と曖昧さに翻弄されて途方に暮れることになります。さらに言えることは、ギリシアあるいはラテンの批評家は誰でも、批評の様式の点でも、自分が母国語の優雅さと繊

1) ホラティウス『詩の技法』351-3

細さはすべて熟知していることを明らかにしているのです。

実は、学問のあらゆる分野に優れた洞察力がないにも関わらず、批評家として身を立てることほど馬鹿げたことはありません。ところが、わが国の著述家たちの中で批評の仕事で際立とうとしている人たちの多くは、前述の点で欠陥があるだけでなく、ごく一般的な芸術・科学体系に精通していないことを、使用する言葉遣いや混乱した思考方法によってあからさまに暴露しています。フランスの著述家たちから引用した一般的な規則とある種の決まり文句は、時として、無知で愚鈍な書き手を賢明で手ごわい批評家に仕立てることがあります。

審美眼も学識もない批評家を見つける一つの大きな目印は、それまでに人々に受け入れられ賞賛されていない一節を取って称えるようなことはめったになく、もっぱら取るに足らぬ欠点や誤りに目を向けていることです²⁾。これをうまくやるのは非常に簡単なことです。普通の読者なら誰でも、新しい詩が発表されると、知恵と意地悪さを発揮してそれをあざけり、しかも当を得た形で行うことになります。この点について、ドライデン氏はあの有名な二行で実に上手に語っています。

誤りは、麦わらのように、表面に漂います。

真珠を探そうとする人は水面下に潜る必要があります³⁾。

真の批評家は、隠れた美点を見つけ、注目に値することを社会に伝えるために、欠陥よりも長所に目を向けるべきです⁴⁾。著者の最も素晴らしい言葉や筆致は、洗練された学問に対する喜びを持たない人にとっては、この上なくいかかわしく非難の余地があるように見えます。一般に、意地悪く見境のない批評家は、非常に激しくこの点を攻撃します。キケロはいわゆる「燃えるような言葉」に焼印を押し、冷ややかで意地悪な批評でそれをあざけるのはとても簡単なことだと述べています⁵⁾。ちょっとした知恵があれば、美点を見つけ出すことも欠陥をさらに拡大することもできます。欠陥を暴きますと、当然、分別のある読者には憤怒を生みますが、その癖が身についている人々には効果的です。大多数の人々は少しでも知恵を働かせて笑い飛ばすものはすべてそれ自体滑稽だと考えてしまいます。

こういった浮かれ騒ぎは批評家にとっては例外なく不適切です。なぜなら、浮かれ騒ぎは読者を納得させるというよりも読者に偏見を抱かせ、欠点だけでなく美点をも嘲笑的にすることができるからです。適切なテーマについて分別を働かせて書くことができない人は愚かで退屈ですが、不適切なところで分別を発揮する人も愚かで馬鹿げています。おまけに、あざけりの才能を持つ人は自分の大切な才能を発揮するために、あらゆることに欠点を見つけ出す傾向があります。そして、しばしばそこに欠点があるからではなく、楽

2) 「自らの意見を出さず、人々に流布した意見に飛びつく者がいる」(ポーブ『批評論』408-9)

3) ドライデン『すべて愛ゆえに』序25-26

4) アディソンの考えはドライデンに近い。

5) 当時の読者はこれを読むとジョン・デニスのことを思い浮かべたに違いない。批評家ジョン・デニス(1657-1734)はポーブと仲が悪く、互いに激しくやりあったという。

しむことができるからという理由で、酷評することになりがちです。批評という仕事では、この種の楽しみは極めて不当で不誠実なことです。批評では、古今の巨匠たちが常に真剣かつ啓発的な態度で取り組んできたのです。

今回はあまり報われない仕事なのですが、『失樂園』の欠点について述べる積もりですので、読者のみなさんに以上のことを前置きとして述べておいた方がいいと考えた次第です。その際には、私はあざけりで煽り立てず、欠陥を指摘するに留めたいと思います。また、ロンギノスが述べるように⁶⁾、非凡な才能の持ち主の著作は、過失や手落ちが数多くあっても、正しい書き方の規則に誠実に従った二流の著述家の仕事よりもはるかに好ましいのだと言って置かなくてはなりません。

本日の紙面はボッカリーニの話で締め括りたいと思います⁷⁾。これによりますと、私がここで述べています批評家たちが思慮深い著述家を大いに楽しみにしたことがよく分かります。ボッカリーニはつぎのように語っています：さる名高い批評家は、ある著名な詩人の欠点をすべて抜き出して、それをアポロンに進呈しました。アポロンは非常に丁寧にそれを受け取り、その労に報いるために、それにふさわしいお返しをすることにしました。そこで、アポロンは脱穀したばかりの小麦の入った袋を彼の前に置きました。そして、彼にもみがらと粒とを選別するようにと言いました。批評家は喜んでとても熱心に作業に取り組みました。そしてしかるべき選別が完了しますと、アポロンはその労苦に対してもみがらを贈ったのでした。

第292号 1712年2月4日（月曜日）

彼女が何をしようと、彼女がどこへ行こうと、
ひとつひとつの動作にはさりげなく気品が伴う。（ティブルス）¹⁾

怠けたままでいることに耐えられず、絶えず行動へと駆り立てられる軽快でさわやかな気持ちになれない限り、健康を享受しているとは言えないように、美德の実践においても、何らかの行為で秀でるためには、そこに何か付加された気品が必要となります。ダイヤモンドは本来値打ちが同じであっても、研磨する必要があるかもしれませんし、光度が違って同じ価値があるかもしれません。自分はいかに上手くやっているかと自己満足してはなりません。可能な限り最高最善のやり方であらゆることに取り組むべきです。

キケロによると、『義務論』を書いたのは、人生にはそれ相応の義務を実行するだけの時間がなかったからだとのことです²⁾。また、義務には必ずある種の気品が伴いますし、気品の伴ったあらゆる美德はそのお陰で、その価値は倍加するように思えます。同じことをするにしても、気品と魅力の伴った行為はその有無によって大きな違いが生じます。ち

6) ロンギノス『崇高について』33

7) ヒューズ編『パルナッソスからの助言』（1711）

1) ティブルス（B.C. 54?-B.C. 19?）『悲歌』4.2.7-8

2) キケロ『義務論』1.2.4

ようどそれは、ティツィアーノの風景画にはあの無類の陽光が輝いていると言われているのと同じことです。この場合、陽光が彼の特徴となり、ほかの誰も真似ができない無類の作品となっているのです。

頼みごとを聞き入れる、つまり、親切という義務を果すときほど、私が言っている資質がより明確に分かる行為はほかにはありません。ムンミウスは善行に同意することで名前を失わせることになり、カルスは親切と義務を倍加します。ムンミウスの場合、実際には望まれた願い事は最後に消えますが、非常に疑わしい表情から、恩義を施された側は好意そのものに感謝をすると同時に、その施し方に憤慨することにもなります。カルスは喜んで慈善行為を行う機会を与えるようにと促し、話半分で嘆願に応じ、苦しんでいる人を満ち足りた気持ちで助けるといった表情を浮かべて嘆願を承諾します。

気前の良さに気品が伴うか否かは、そのとき、同胞を喜ばすときに見られる威厳に満ちた喜びのような快活な気持ちでそれを行うかどうかにかかっていると思われます。このとき善良さと善意が満ち溢れることになり、ある人の場合に見られるような、不承不承の愛想の悪い気持ちのおりといったものは一切感じられません。

最も卓越した礼儀正しい行動というものは善意の義務を果す際に何うことことができるのだと述べてきましたので、個人的な生活から一例を挙げて若干補足説明をします。ここには気前の良さがふんだんに発揮されております。これが卓越しているのはまさに人情と善良さが伴っているからです。その例とはプリニウスの手紙のことです。行為が無関係あるいは大げさな装身具を付けない配慮という衣装をまとして実に素晴らしい形で登場していますので、ここにその手紙を翻訳してみたいと思います。

クウィンティリアヌスへ

貴方が満足しておられること、温和な心持でおられること、また、貴方が娘さんに施された教育は貴方ご自身の品性に合致したものであることを私は十分承知していますが、娘さんが突然名士と結婚され、夫の身分にふさわしい衣服や身の回り品を揃えるためにそれ相応の出費が必要となっておられます。そうすることで、彼女本来の価値が増すわけではありませんが、光彩と輝きを受け入れるのです。貴方の資産は貴方の心の豊かさと同様に、適度なものであることは分かっていますが、私に負担の一部を負わせて頂かなくてはなりません。お子さんの親同然である私としましては、彼女に1250クラウンプレゼントします。これだけでは受け取って頂けないということでしたら、もっと多額でも構いませんが。

草々³⁾

このように、善意というものは好意から行われるべきものであって、生き生きと輝いたものでなくてはなりません。受け取り手の望みと必要性に応えるだけでなく、願いを越えたものでなくてはなりません。善意に新しい魅力を付け加え、贈り物の抵抗感を和らげる

3) プリニウス (61? - 113?) 『書簡集』第6巻32

のはこういった上手な振舞い方です。そうでないと、善意は感じがよいというりも不快なものとなってしまいます。これがないと、勇敢さは残忍性に、学識は術学に、この上ない振舞いは気取った態度になります。信仰心そのものでさえ、そこに気品が補助的な役割として伴っていなければ、不機嫌で不愉快なものにしてしまいがちです。元来の形的美徳が信仰心に美しさを付加することになり、神聖さという美に照らし合わせて、告白者に正当な肩書きを与えるのです。このことをしっかり教えられている人物は、さまざまな姿を装うことができ、多くの人たちを喜ばすことができます。その人にしかふさわしくない数多くの行いができます。異なっているのは行為そのものでなく、行為のやり方なのです。

アグラウロス⁴⁾とカリクローの顔立ちそのものを見てみますと、共に同じように奇麗ですが、全体を見てみますと、比較に耐えられません。一方は数えられないほどの名状しがたい気品がみなぎっており、もう一方には数知れない名状しがたい欠点がみなぎっています。

端麗な容姿と気品のある振舞いは、発言に計り知れない重みを付与します。これがないと、往々にして年とった厳格な人物の叱責や助言を受けることになり、相手方を不快にさせてしまいます。若さと美しさは、上品で適切な厳格さが伴うと、この上なく品行のよろしくない人物にさえ、恥辱感を覚えさせる大きな力となります。ミルトンでは、悪魔が恥じ入るような描写はありませんが、一度だけその描写があります。それは美しい天使から非難されたときがそうです。

智天使はそう言ったが、その若々しく美しい顔に現れていた
 厳然たる非難叱責の表情には、何人も敵し難い気品が備わっていた。
 悪魔は、恥じ入って佇立し、いかに善というものが畏るべきものであるかを感じ、いかに美徳が美しい姿をもつものであるかを知った—
 そして、自分が失われた者であることを知り、かつ悲しんだ⁵⁾。

何事につけ気品を失わないようにしようとする配慮は、最も卓越した心の持ち主には最後の瞬間まで持続します。まさに死に際でも無様な姿を避けたのです。カエサルは無様な姿を見せないように、衣服を体に巻きつけました⁶⁾。自刃するときのルクレティアの振舞いでの最大の関心事も自らの体が宿っていた心に値する姿勢で横たわるようにすることでした：「彼女が最後に考えたことは、どうしたら見苦しくない死に方ができるのだろう」⁷⁾

前略

私は財産はありませんが、心だけはとても高潔な娘です。つまり、極度に誇り高く自惚れの強い娘というわけです。私は絶えずお金持ちに毒づいています。私の心を探ってみま

4) オウィディウス『変身物語』2.737-832 アグラウロスはケクロプスの娘で、妹ヘルセの幸せに嫉妬するあまり、石に変えられる。

5) 『失樂園』第4巻844-9

6) スエトニウス『皇帝列伝』(1692)

7) オウィディウス『祭暦』2.833-4

すと、ただ単に私自身が同じようにできないという理由から腹を立てていることに気づきます。私はフープ・ペティコートを身に着け、絹にすべきものもすべてキャラコで済ませています。お金がなくて誇り高いというのはひどいものです。そこで、何卒この件につきましてご高説をお聞かせ下さい。

草々

心穏やかならざるイゼベルより

第293号 1712年2月5日(火曜日)

【アディソン】

分別のある人は常に運を味方につける¹⁾。

有名なグラシアン²⁾は、宮廷でのし上がっていく人の処世訓を記した小著の中で、読者に対して、幸運な人を仲間にし、不幸な人とは付き合わないようにとの助言をしています。これは誠実な人にとってはさもしい指針ですが、出世したいと考えている人たちにとっては有益であるかもしれません。いわゆる幸・不幸というものの大部分が、生き方および人生設計の善・悪にかかっているのは確かなところですが。何をやってもついていないと不満をもらすのを聞きますと、私は意地悪くあまりにも鈍な人ではないのかと勘ぐってしまいます。この考え方と一致して、枢機卿リシュリユーは不幸と無分別という二つの言葉は同じことなのだと言っています³⁾。枢機卿自身は分別と幸運双方に恵まれましたが、彼の名高いライバルであるオリバレス伯爵は彼の仕事は一度も成功したためしがないと申し立てられたために、マドリッドの宮廷で信用を失墜してしまいました。ある著名な著述家によれば、このことは彼の無分別を遠回しに非難していたのだということです。

キケロはローマにポンペイウスを将軍として推薦するときに、彼の勇気と振舞いと幸運という3点を挙げました⁴⁾。おそらく、以上の理由、つまり、一連の幸運が降りかかる人物には分別のある手腕が宿るということから、独裁者スラ⁵⁾だけでなく、数名のローマ皇帝までもが、今でもメダルに見られるように、自らに「フェリクス」つまり「幸運者」という称号を付けたのです。実際に、異教徒たちは人の評価をするときに、ほかの資質よりも幸運に重きを置いたようです。私が考えますに、これは来世に対する強固な信念を持っていない人たちにとってごく当然なことです。多分、私の観察では見えないのですが、顕著な祝福を受けている人物には、必ず神の目に開かれた特別な美点と完徳の蓄えが備わっているものと思います。ホメロスやウェルギリウスの英雄たちが決意するつまり攻撃を

1) ウィンタートン『ギリシアのマイナー詩人たち』(1677)

2) グラシアン・イ・モラレス(1601-58)はスペインのイエズス会士であり作家。ボルテール、ラ・ロシュフーコー、ショーペンハウエルなどに大きな影響を与えたとのこと。

3) アディソンはバイルの考えを参考としている。枢機卿リシュリユーはルイ13世の宰相。

4) キケロ『皇帝論』10.28

5) プルターク『スラ伝』6.3-4

仕掛けるときに、必ず何か神格を示す行為や指図を出したわけはどこにあるのでしょうか？それは、おそらく、詩人たちが神々から支持されることを最大の名誉と考え、当然のことながらその人物の並外れた美点を暗示する神々の支援を列挙することが、その人を賞賛する最善の方法と考えたからに違いありません。

報いと罰という将来の状態を信じている人々は、成功を基準にして人の美点に対する考えをまとめる場合に、とても馬鹿げた振舞いをします。確かに、人間誰もが誕生から死の間で完結するのだと考えますと、神はその人の存命中に美德や完徳に報いる機会はありませんので、幸運こそが真の美点を測る尺度であり基準だと考えてしまいます。不幸の重圧を受けている高潔な不信心者が、ブルータスが死の直前に言ったという、「ああ美德よ、私はお前を大切なものとして賛美してきた。だが、お前は空ろな名前にすぎないのだ」⁶⁾と叫ぶのには根拠があるのです。

ここで最初の話に戻します。確かに分別が現世における私たちの幸・不幸をもたらす大きな要因となるのですが、多くの予期しない出来事が起こるのも確かです。このことがしばしば人間の英知が準備した実に見事な計画をゆがめてしまうのです。必ずしも速い者が競争に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つのもないのです⁷⁾。運命を絶対的に支配できるのはまさに無量の英知にはかなりません。人間が所有できる最高の英知を発揮しても、偶発的な出来事や不測の事態には対応できません。往々にして、分別がなければ幸福になっていたかもしれないのですが、常に大きな警告を内包している分別がこれを妨げます。成功しそうなことだけを目標にし、分別の指図をきちんと守る人は、しばしば楽天的気質、つまり、もっと愉快な軽はずみの結果である大きなかつ予期しない成功に遭遇することはありません。このことはおそらく、よく言われるように、運命の女神は、他の女性たちと同様に、お年寄よりも若者に目をかけることを喜ぶからなのです。

総じて、人間は先見の明のない生き物であり、降りかかる出来事は多種多様ですので、私としましては、ティロットソン博士⁸⁾の考えに賛成して、かりに神の存在を疑ったとしても、私たちが生きて行く上で頼れる無量の英知と善の存在があった方が望ましいことは確かだと言わざるを得ません。

成功を自らの手腕のせいにし、分別の習得というよりむしろ神の施す賜物であることを尊重しないのは、とても僭越なことです。無敵艦隊を撃破した直後に、その記憶を不滅にするために、エリザベス女王が鑄造したメダルを私は大いに気に入っています⁹⁾。女王の敵であったスペイン国王たちが、彼女の栄光を傷つけるために、艦隊の敗因をイギリスの勇壮さではなく嵐の猛威のせいにしたのはよく知られていることです。エリザベス女王は、これを名誉の減損と考えないで、神の顕著な恩寵なのだと誇りました。そこで、女王はメ

6) アナエウス・フロールス、2.17.11

7) 『伝道の書』第9章第11節

8) カンタベリー大主教ティロットソン（1630-94）は一度ならずこの考えを述べた。

9) メダルは実際に1588年オランダで鑄造された。当時、オランダとイギリスは共にスペインと敵対していた。

ダルの裏側に、嵐が撃退した艦隊を描き、「神が風を起こし、彼らは四散した」との銘を刻んだのです。

今名前を思い出せませんが、ことのほか幸運児であったギリシアのある有名な将軍¹⁰⁾は、友人たちに囲まれて勝利を並べ立てているとき、最後に「この戦いでは運命の女神は加担してくれなかった」のだと付け加えたとのこと。その後、彼のやることは何事もすべて成功しなかったということです。

傲慢および自らの能力への思い上がりは、良識と美德を備えた人にとってはとても不快なことです。謙虚な心を喜ぶ神は非常に不快に思うに違いありません。摂理は私たち自身の計画とか分別は昇進には何の貢献もしないことを故意に示していると思われます。

このテーマについては、すでに心に浮かぶ引用はいくつかしましたので、最後に短いペルシアの寓話を紹介してこれを締め括ります¹¹⁾。一滴の水が雲から海に落ち、大量の水の中で途方に暮れていることに気づいて、つぎのような言葉を発しました。「ああ、この巨大な海の中では、私は何と取るに足らない存在なのだろう。私の存在は宇宙にとっては無意味だ。私は無に等しいのだ。神の業の中の最小のものよりもっと小さいのだ」そのとき、このしずくの近くにいた牡蠣が、たまたま口を開け、控え目な独り言を言っているしずくを飲み込んだのでした。この寓話によれば、このしずくは長い間貝殻の中でじっとしていたのです。そして徐々に成熟して一粒の真珠となり、やがて、潜水夫の手に渡りました。そして長い冒険を終えたこのしずくは、今ではペルシアの王冠の頂に鎮座しているあの名高い真珠となっているのです。

第294号 1712年2月6日(水曜日)

【スティール】

全面的に幸運に頼っている美德に、
敬意を払うのは難しい。(キケロ)¹⁾

尊大さはとりわけあらゆる人たちが毒づきたくなる恥すべきことです。だが、ほぼすべての人々が後ろめたく思う点がひとつあります。それは運命の女神からの贈物を必要以上に有難く思うことです。ここイギリスには、栄誉のしるし、例えば、有利な立場にいる人物について語るとき、彼らは身分のある人だという言い方があります。確かに、富の適切な使用はありとあらゆる立派な資質をだしきるべきだということを含意します。身分のある人と言う場合には、財産を自由にできるその人が公正で慈善心に富み、慈悲深いことを示します。その結果、その人はごく当然のように人々から尊敬されることになります。だが、富が虚飾と贅沢のためだけに使用されるときは、金持ちであることは名誉と敬意にはほど遠い存在となります。事実、早めに欲望に手を打たずに極端な渴きと飢えに見舞われ

10) アテナイのティモテオスのこと。

11) ペルシアの詩人サーディー(1213-1291)『果樹園』(1257)から。

1) キケロ『修辞について』4.17.24

る人が窮乏状態を忘れ、貧困に目を向けないのは、この上なく尊大な振舞いです。西洋では、暗礁に乗り上げた船から脱出し、同国人と協力して仲間の船員を見殺しにして、船を難破させる人物は、この上なく嫌悪すべき人物だと見なされました。だが、あらゆる人がもちろん欲しいものがすべて手に入るわけでもなく、他人の満たされない苦境に思慮がないわけでもなく、同僚を裏切るわけでもありません。周囲を見回していますと、富と貧困に関しては、虚飾に引きずり込まれている人がいますし、周りの多くの人たちに軽蔑して勝ち誇ったように見下す人がいます。その一方、同じ通りで、同じような体格の人物が自らの窮状を訴え、何か施しをと声を上げているのです。どう考えても、この両者が同じように人間だとは思われません。ところで、私たちは誰もが運命のことが気になりますので、私はしばしば罪悪感と無邪気さの代わりに貧困と富のことに関心を持つてしまうことを嘆いています²⁾。だが、いつの時代であっても、権力と富の優位性を求めて競っている人たちがいる一方で、非常に寛大な心の持ち主で通俗な偏見に心を奪われず、自分よりの下位の人たちの窮乏状態に思いを馳せる人たちもいます。最近創設された「慈善学校」³⁾は、時代が生み出した最も素晴らしい公共心の表れです。実際にこの種の慈善が実行に移されてきた経緯を考えて見ますと、慈善学校がこれほど異彩を放っているのは、その数とか重要性というよりも運営の仕方が優れていたことによります。考えられないことですが、14年間で慈善学校のために注がれた金額は5千ポンドで子供の数は1600人となっています。贅沢と愚行について厳しいことを言うことはできません。それゆえ、フープ・ペティコートをつけたご婦人が絹半ヤード分のお金をこういった学校にいる無邪気で無力な女の子たちの衣服や食糧や教育のために提供して貰えれば、私は直ぐにでもこのご婦人方と和解したいと思っていることだけをお伝えしておきます。このことに気づいて頂けると、その人はこの輝かしい日⁴⁾に髪や胸元に飾り立てる宝石よりももっと光り輝く存在になります。女性に辛らつな言葉を投げかけるのは礼を失したことになるでしょうが、男性にはもう少し腹藏なく言えるかもしれません。富を享受し、他人に何の慈善も施もしないで置きながら、何も考えずに生きて、自分はほかの人たちに不実なことも不釣り合いなことは何もしていないと思うのは異様です。この慈善学校に関しては、ひとえに寛大な心が物を言うのです。見返りを求めずに気前よく振舞うのです。義務が分からない子供のために、社会のために、将来の誠実な職人のために、そうするのです。神のためにもそうするのです。神を崇拝する気持ちを教えるのです。私はこれは非常に賞賛に値する制度だと思います。自由で敬虔な教育を受けた善良で有益な徒弟を世の中に送り出すことになります。当然の用心として、主人は獲得した徒弟には自分の出す指図はすべて守らせるようにします。主人を父であり友であり後援者だと親しく感じる徒弟は、ほどほどの賃金と優しい処遇だけを

2) 第167号、219号、268号参照。

3) アディソンは『ガーディアン』第105号でも慈善学校を褒め称えている。慈善学校は17世紀末から18世紀前半にかけて労働者階級子弟への基礎教育を目的に設立された。キリスト教および読み書きそろばんの初歩を教えた。

4) アン女王の誕生日。

望むことになります。徒弟同士で馴れ合いになるのは、子供にありがちな悪習です。この学校で教育を受けた者は、そのさもしさが分かり、率直さを失わないで済みます。この慈善が広く行き渡りますと、召使たちから生み出される不親切や中傷的な噂はなくなるに違いありません。善良な人なら、自分が雇い入れようとする人物のこれまでの生活やその人物の家族や子供たちのことが理解出来ます。このことによって、愛情のこもった従属関係が生まれます。要するに、主人の義務には父としての態度が伴い、大きな気がかりと不安を取り除いてやることになり、召使はそれに対して感謝と勤勉でもってお返しをすることになります。私がこの話をするようになりましたのは、つぎの日曜日にセント・ブライド教会⁵⁾で(どなたか篤志家の費用で)少年50人が衣服をあてがわれ席を占めることになるとの手紙を受け取ったからなのです。本紙でその手紙を公表することによって寄稿者の方のご期待に添えれば幸いです。この件では、数多くの優秀で学識のある方々が述べておられることに何も付け加えることはありませんが、手紙を下された方のような寛大な心の持ち主を感動させる何かがあると思えますので、この慈善に関するスネイプ博士⁶⁾の説教の素晴らしい一節を書き写したいと考えます。これはわが寄稿者が手紙に同封してくださったものです。

「聡明な神は、現世における衣食住の便の多くを欠いている貧しく恵まれない人々の不都合に対しては、来世での幸福をふんだんに用意して、その償いを十分になさっておられます。もし彼らがもっと恵まれた生まれであり、つまり、もっとお金があったなら、このような教育の恩恵を受けることはなかったのです。彼らはこれを受けるに値するほど下層の生まれなのです。金持ちがお金では買えないような利点を彼らはこの学校では無料で受けることになります。ここでの勉強は、通例、お金を払って受ける勉強よりももっと啓発的なものです。こうして、彼らは不運に落胆することによって徳が高められるのです。彼らの貧困は実際には彼らの昇進でもあるわけです」

第295号 1712年2月7日(木曜日)

【アディソン】

ほどほどということを知らない女性は、減っていくお金を
使い果たしてしまう。ひっきりなしに与え、費やし、
無駄遣いし、すり減らすのだ。そして、お金では喜びを
買うことができないことを知る。(ユヴェナリス)¹⁾

5) セント・ブライド教会は、フリート・ストリートの南側にあり、1680年に再建された。この教区には、少年50人を(後には少女50人をも)収容する慈善学校があった。

6) 神学博士アンドリュー・スネイプ(1675-1742)は、セント・メアリ・アット・ヒル教会の牧師で、1711年5月24日木曜日にはセント・セバルカーズ教会で、ロンドンおよびロンドン近郊の慈善学校の評議員たちを前にして説教をした。その中でおよそ4千人の子供たちがその恩恵に浴していると述べた。

1) ユヴェナリス『諷刺』6.362-5

観察者殿

私は大厄年²⁾を迎えた、生まれつきおとなしい男です。ほぼ12年前に、何の因果か良家の元気のよい若い娘と結婚しました。だが、大同盟³⁾よりも厄介な条約を結ぶまでは結婚話をまとめることが出来なかったのです。さまざまな条項の中に、「生活費」として彼女に年400ポンド与えるとの1項が明記されました。結婚してからは、私は彼女の全権大使にこれを年4回に分割して渡さざるを得なくなったのです。結婚以来、私はこの厳粛な協定を忠実に守って来ました。そういう次第で、結婚後子供が数名できました。意地悪な隣人の言うことを信じれば、彼女に与える生活費は子供たちのために少なからぬ貢献をしているとのことなのです。私の期待に反して毎年生まれる子供たちの教育のことが非常に気がかりですので、子供たちのために備えるために、母親に上記生活費の義務から解放してくれるように頼んだのです。この提案は彼女を憤慨させました。先回の支払いが少し遅れていると知った彼女は、毎日私を拘束させると脅すのです。そしてとどのつまりは、契約通りにしなければ刑務所で亡くなることになるかとまで言うのです。落ち着いてくると、即刻支払わなくてはならない賭博の借金を少し抱えている、さらには、この条項の金額を減らすとそれなりのお付き合いができなくなる、と付け加えるのです。そういうわけですので、これを契機に貴殿がお触れになっていないこの件につきまして貴殿のお考えをお聞かせ頂き、先祖にこれの対処の仕方の前例があるか否か、また、グロティウスやプーフェンドルフ⁴⁾あるいはその他の民法学者に生活費に関する記述があるか否かをお知らせ願えれば幸いと考えた次第です。

敬具

郷土ヨシア・フリブル

私ほど女性の擁護者を公言している人はいませんように、しぶしぶ古くからの権利や特権を侵害する人もいません。だが、生活費という考えが出来たのはごく最近のことで、私たちの曾祖母の時代にはありませんでした⁵⁾。そして、今日の多くの婦人方にも受け入れられていませんので、これが広まらないようにすることは男女双方にとって大切なことだと私は考えます。

おそらくフリブル氏が妻に生活費を渡すことは、夫に刃向う武器を与えていることになり、夫の屈辱をそそのかしていることになるのだとほめかしている点では、それほど誤解していなのかもしれません。実際、女性の美醜、夫の年齢の高低の度合いによって、女

2) 63歳と81歳は、大厄年 (grand climacteric) と考えられた。

3) 大同盟は、1701年、ハーグにおいて、イングランド、オランダ、神聖ローマ帝国の間で締結された。

4) ユゴー・グロティウス (1583-1645) はオランダの法学者で、その著『平和と戦争の法』は1625年に出版された。サミュエル・プーフェンドルフ (1632-94) はドイツの法学者で、その著『自然法と万民法』は1672年に出版された。二人は当時最も著名な民法学者で、実定法とは対照的に自然法つまり慣習法を説いた。

5) Pin-money (生活費) という語の OED の初出は1697年。

性はそれなりの生活費を必要とし、結婚契約でそれに合わせた額が決まるといったことがよくあります。また、女性の身分が高いことが結婚への報いであるこの条項を大いに掻き立てることになることを認めなくてはなりません。

ところで、双方の年齢や境遇がほど同じ場合には、生活費を要求するのは極めて異例だと考えざるを得ません⁶⁾。でも、この点で破談になった例も散見されます。生活費を渡したくないという理由で恋人との縁を切る人のことを、外国人とかこの慣習を知らない人はどう考えるでしょうか？ また、恋人側からこれに年間5百ないし6百ポンドの要求があると知ったら、この女性のことをどう考えるでしょうか？ 私たちの慣習を知らない人が、グレート・ブリテンで認められている生活費の額を知らされたら、この国では何と桁外れな消費をしていることかと思うに違いありません。「1日ピンを1本使うと年に1グロートとなる」という儉約を旨とする諺がわが国にはあります。この計算によれば、わが友フリブル氏の細君は毎年850万本のピンを消費しているに違いありません。

わが国のご婦人方がこの条項ではその他の生活必需品をも含んでいるのだと主張していることを承知しています。それゆえ、私は、女性たちの名誉のため、これを「お針子の給金」と呼んだ方がいいのではと思います。この方が家計のやりくりをきちんとしている感じがしますし、意地悪な人たちに女性がいつも最重要視しているのはドレスや装飾品のことだと思わせないで済むに違いありません。

私は女性の理論家の中に、この慣習を守るため、これは夫が吝嗇ないし守銭奴であった場合に備えて、どうしても必要な準備金だと強く主張する人がいることを承知しています。要するに、彼女たちはこの手当てを一種の離婚扶養料と考え、実際に夫と別れずにその権利を主張するわけです。私が思いますに、不安の可能性が少しありながら、従順に夫に身を任せ、生活必需品をあてにしない人物に身柄を預ける女性は、ごく当然のことながら、(陳腐な諺の表現を借りますと)「小金に賢く大金に愚」と非難されることになります。

小心者の将軍は結果が見込み外れになる場合に備えて、戦闘の場では必ず退路を確保するとのこと。一方、卓越した征服者は勝利か死を覚悟して、船を燃やし、橋を壊して、つまり、背水の陣を引いて戦いに臨みます。同様に、慎重に退路を用意し、生活を共にする人の愛情がない場合の幸せな生き方を念頭に置く女性を私は信用できません。夫婦の財布が別々であることは、私の考えでは、ベッドが別であるのと同様に不自然なことです。双方の喜び、好み、そして関心が異なる場合、結婚は幸せなものにはなりません。妻の安らぎと幸福が自分の身にかかっているのだという感覚ほど夫の愛を鼓舞するものはありません。この場合、女性は、自分の誉れであり、慰めであり、支えであると考える相手を喜ばせるために、ありとあらゆる手を尽くします。

このため、私は無骨な田舎の郷士の振舞いにはさほど驚きません。生活費の要求を撤回しない若い未亡人のやり方に大きな衝撃を受ける彼は、彼女の欲得ずくの気質に大層激怒

6) アディソンは、彼の友人エドワード・ワートリー・モンタギューとレディー・メアリ・ピアポントのことを念頭に置いていたと考えられる。この二人は結局1712年の夏に駆け落ちをすることになった。

し、憤慨して「君は私を奴隷と考えているが、君への生活費は意に介していないこと世間に知らせてやる」のだと彼女に言ったのです。こうして、彼は部屋から飛び出し、二度と彼女を見ることはありませんでした。

プラトンの『アルキビアデス』⁷⁾の中で、ソクラテスは、ペルシアを旅して来た人物からつぎのような報告を受けたと語っています。この人物が広大な土地にさしかかり、ここはどこか尋ねると、女王のガードルとの答えが返ってきたとのこと。また、その土地のそばの広い野原は女王のボールとのこと。同様に、各所に女王のドレスという場所があったとのこと。こういった土地は間違って「ペルシア女王の生活費」と呼ばれるかもしれないということでした。

おそらく、プラトンのこの文章を読んだことのないわが友サー・ロジャーがあるとき、私に向かって（以前に本紙で取り上げたことのある）強情な未亡人に求愛するとき、彼女がそれを受け取るのがふさわしいと考えたら、プレゼントにする予定のダイヤモンドの指輪を手に入れるために土地を百エーカー売却した、結婚式の日には彼女の頭上に見事な檜の木50本が載ることになっていたのだと語ったことがあります。彼はさらに、彼女に真新しいリンネルを着せてやるために炭坑を一つ贈呈することになっていた、また、扇を買ってやるために風車小屋のあがりも差し出すことになっていた、また、ペティコート代には刈り取った羊毛を3年に1度提供することになっていたのだとのことでした。騎士はこれにいつも付け加えるのですが、自分の服のことは気にしないが、レディー・カヴァリには村一番のドレスを着せてやることになっていたとのことでした。サー・ロジャーは、多分、この点だけでなくほかのさまざまな点においても、何か奇妙で風変わりところがあるのでしょう。ところで、生活費という気まぐれが広く行き渡りますと、資産家の紳士諸氏はごく当然のように、生活費ということで何エーカーもの広大な土地を無くしてしまうものと私は考えます。

7) プラトン『アルキビアデス』1.123B アルキビアデスは、ペロポネソス戦争時の将軍で、ソクラテスの弟子だった。